

2023年度

K 2—1

国 語

2月25日(土)
【前期日程】

人文社会科学部（法学科）

15 : 20 ~ 16 : 10

注 意 事 項

試験開始前

- 1 監督者の指示があるまで、問題冊子、解答用紙に手を触れてはいけません。
- 2 監督者の指示に従って、全部の解答用紙(2枚)に受験番号を記入しなさい。

試験開始後

- 3 この問題冊子は、4ページあります。はじめに、問題冊子、解答用紙を確かめ、枚数の不足や、印刷の不鮮明なもの、ページの落丁・乱丁があった場合は、手をあげて監督者に申し出なさい。
- 4 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 5 文字数制限のある解答用紙の記入については、下記の点に留意すること。

<ul style="list-style-type: none">・書き出しは、一マスあけない。・句読点はそれぞれ一マスとする。・小さな文字「っ」「ゃ」「ゅ」「ょ」は一マスで使う。

- 6 問題は、声を出して読んではいけません。
- 7 配点は、比率(%)で表示してあります。

試験終了後

- 8 問題冊子は、必ず持ち帰りなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(配点六〇%)

日本語で「愛国(心)」と呼ばれる思想の起源は、古代ギリシャにまで遡ることができませんが、後代の思想家たちが特に重視した古代のパトリオティズムの理論家を一人だけ挙げるとすれば、それは古代ローマのキケロでしょう。この古代ローマ共和政を代表する政治家にして名演説家、そして哲学者は、祖国愛を決定的に重要な政治的美徳であるとしてシヨウヨウしました。

キケロのパトリオティズム論は、「共同体を形成して共同生活を営むことが人間の天性である」という認識を前提としています。一人では達成できないことも、多くの人々が手分けして労働し、財やサービスを交換するなら可能となります。つまり、共同体はその構成員に一人では味わえない豊かさや幸福を約束するわけです。

高貴な人生とは、そのような幸せな生活をもたらす共同体へのいわば恩返し^Aとして共同生活から生じる義務を果たすことにある、とキケロは考えました。つまり、自分の個人的利益を共同体の利益に合わせることです。共同体の利益、すなわち共通善を軽んじて、自己利益だけを追求する人ばかりになれば、共同体の連帯は解体してしまうからです。

このように、共通善を自己の利益と見なすことがキケロの思想の中核にあります。一口に共同体といっても、人間の共同生活には様々なレベルがあります。最小の共同体は家族であり、そこから友人や隣人を含めた集団や、村落共同体、都市共同体を経て、一つの国、ひいてはすべての人類の共同体を考えることができます。その中で、どのレベルの共同体に対する忠誠を優先すべきなのでしょう。

この問題に対してキケロは、文脈に応じて異なりますが、総じて最も重視すべき共同体とは「パトリア(祖国)」であると主張します。では、そのパトリアとはキケロにとってどのような共同体を意味したのでしょうか。ここから、キケロのパトリオティズム論の核心です。

キケロによれば、パトリアには二種類あります。一つは自然的祖国、もう一つは市民的祖国です。

自然的祖国とは、自分の生まれ故郷のことです。そこには両親に対する愛情や自分の幼い日々に対する郷愁といった情緒的な事柄が含まれます。

これに対し、市民的祖国とは、市民が法律によって共有する共同体のことです。キケロ個人にとつての市民的祖国とは共和政ローマでした。市民は法的地位を獲得することでその共同体に所属するのですが、その見返りとして、市民的祖国のために自己犠牲を払う義務を負う、とキケロは主張します。

市民的祖国こそは、市民である私たちが抱く愛情の究極の対象であり、私たちが所有するすべてのものを、ひいては自分の生命さえも犠牲にする義務を負うのだ、というのです。

この究極の自己犠牲のことをラテン語で「祖国のために死ぬ」と(*pro patria mori*)と言います。

こうして見ますと、自然的祖国と市民的祖国のどちらを選ぶかという場面では、当然、市民的祖国を選ばなければなりません。例えば、両親に忠実であるべきか、市民的祖国の利益を優先すべきか、という場合、両親を犠牲にしても市民的祖国に忠実であるべきだ、というわけです。

キケロが市民的祖国への忠誠心を強調する際、パトリオティズムという思想的伝統における二つの基本的な考え方を提示していたことに注意してください。市民的祖国のための自己犠牲といっても、実際に祖国のために戦って死ぬべきだ、という戦時におけるパトリオティズムと、通常の共同生活において市民としての公共的義務を果たすべきだという、平時におけるパトリオティズムという、二つの考え方をキケロは主張していました。

このように、パトリオティズムは「平時に、政治的共同体の共通善に奉仕する精神」と、「戦時に、政治的共同体を外敵から守るために自己犠牲を厭わず戦う態度」という二種類に大別されます。

この区分は、後に一九世紀イギリスの哲学者トマス・ヒル・グリーンが指摘したように、パトリオティズムという概念にとって重要です。しかし、既存の研究の多くは、パトリオティズムや祖国愛という概念を論じる際、平時と戦時のどちらか一方だけを検討する傾向があり、これらを区別しつつ両方を同時に視野に収めるものが意外と少ないのです。

ちなみにキケロは、この二つのうち平時に発揮するパトリオティズムの方が重要だと主張しています。なぜなら、戦時における祖国愛は暴力のコウシを伴い、暴力とは人間らしいものではなく野獣的な性質を有するからです。その意味で、「祖国のために死ぬ」という軍事的側面ばかりを注目することは、キケロ以来の伝統としてのパトリオティズム理解としては不適切であると言えます。

さて、古代のパトリオティズムに関して、もう一人重要な人物を挙げるとすれば、古代キリスト教父の一人として有名なアウグスティヌスがいます。アウグスティヌスのパトリオティズム論は、一言でいえば、キケロが展開したパトリオティズムの考え方に大筋で好意的でありながら、それをキリスト教的に組み替えた点に特徴があります。アウグスティヌスによって、キリスト教的なパトリオティズムがソウシされたわけです。

では、そのキリスト教的なパトリオティズムの特徴とは何でしょうか。

パトリオティズムの言説とは「パトリアとは何か」という問題を中心に展開するものだということを思い出してください。

キケロの場合、それは市民的祖国を意味しましたが、現実問題としては、キケロ自身が属したローマを意味していました。それに対してアウグスティヌスは、ローマのような現世の国をパトリアと見なすことに異議を唱えます。なぜならローマよりも真の正義を実現している「偉大なパトリア」が他に存在するからです。つまり、アウグスティヌスにとつてのパトリアとは他ならぬ天上の「神の国」だったわけです。

そのようにアウグスティヌスが論じたのは、キケロの祖国愛の考え方に否定的だったからではなく、むしろ、ある意味で深く共感したからだった、というのが興味深いところです。

アウグスティヌスは、キケロのパトリオティズムが共通善への奉仕を中核とする考え方だったことには共鳴しているのです。ただし、キケロは、市民が共通善に貢献するようになる動機として「名譽心」^Bを挙げています。つまり、政治的美徳を有する市民は、同胞たちの賞賛の的となり、この世で榮譽に浴することを期待して祖国愛を發揮し、共通善に献身するというのですが、この点にアウグスティヌスは深刻な問題を見出します。

とはいえ、実はキケロ本人も、名声の獲得欲が祖国愛を發揮するための心理的起動力になるという考え方には危険が伴うことを自覚していました。つまり名声をカツボウするあまり野心的になり過ぎて、不正に手を染めるようになりがちだということです。このように、名譽心に対するキケロの態度は両義的だと言えます。

キケロのどつちつかずの態度とは対照的に、アウグスティヌスは、このような名譽心や名声欲が究極的には偶像崇拜に至ってしまうと厳しく警告します。祖国愛に燃えたローマの英雄たちが、名声や榮譽を求めてローマのために献身したことをアウグスティヌスは認めますが、同時に、そうしたヒロイズムには肥大化したプライドが伴っていることを問題視するのです。

なぜなら、アウグスティヌスによれば、プライドこそは諸悪の根源だからです。あたかも自分を中心に世界が回っているかのようなサツカカを生じさせる過剰なプライドは、自分自身を偶像に仕立て上げてしまふ恐れがあるというわけです。

しかも、市民の間で名譽欲が掻き立てられるほど、社会は連帯感を失う危険があるとアウグスティヌスは指摘します。そもそも名譽というものはごく少数の人々に与えられるからこそ、「名譽」としての意義を持ちます。すべての人が持ち得るようなものでは「名譽」として何の価値もありません。しかし、創造主である神はすべての人々によって追求されてもその価値を失うことはありません。その意味でも、神の国こそがパトリアとして万人によって追い求められるべきだ、というのです。

このように、ローマに代表される地上の国をパトリアと見なす立場を徹底的に拒否する点に、アウグスティヌスのキリスト教的なパトリオティズム^Cの一大特徴があります。しかし当然のことながら、真のパトリアが天上の「神の国」^Cだとすると、われわれ人間が生きる現世にはパトリアなどというものは存在しないことになってしまいます。

しかも、中世初期には、封建社会の成立と共に、法的・政治的秩序が比較的小さな地域に分権化する傾向が生まれ、人々は自分が実際に生活する村落や中世都市より大きな共同体に属しているという実感を持てなくなりました。その結果、キケロのいう市民的祖国の概念は顧みられなくなってしまう。その一方で、人々は自分が生まれ育った地域に故郷としての愛着を抱き続けたので、自然的祖国という概念がかるうじて生き延びたと言ふことはできると思います。

(将基面貴曰)愛國の起源—パトリオティズムはなぜ保守思想となったのか

(注) パトリオティズム—祖国愛

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に漢字に改めなさい(解答は楷書ではっきり書くこと)。

問二 傍線部A「恩返し」とあるが、ここでいう「恩」とはどのようなものか。本文中の語句を用いて説明しなさい。

問三 次の文章は、キケロによる「パトリア」の概念を説明したものである。空欄【I】から【IV】に当てはまる語句を本文中から抜き出しなさい。

パトリアには、【I】と【II】の二種類がある。【II】への忠誠心を考えるにあたっては、【III】と【IV】で区別すべきであり、【III】におけるパトリオティズムが重要である。

問四 傍線部B「名誉心」についてキケロはどのような考えをもっているか。筆者の述べているところを整理して説明しなさい。

問五 傍線部C「アウグスティヌスのキリスト教的なパトリオティズム論」は、キケロのパトリオティズムをどのように批判的に継承しているか。本文中の語句を用いて説明しなさい。

問六 波線部「共通善を自己の利益と見なす」とあるが、共同体の利益を個人の利益と見なすとはどういうことか。具体例を挙げながら、二〇〇字以内で説明しなさい。

正解・解答例

<p>教科・科目名</p>	<p>国語（前期日程試験：令和5年度） 1 / 1</p>	<p>問題番号</p>	<p>K2-1 K3-1</p>
<p>対象学部・ 学科(課程)等</p>	<p>人文社会科学部（法学科、経済学科）</p>		
<p style="text-align: center;">1</p> <p style="text-align: center;">60 %</p> <p>採点時の配点 120点</p>	<p>問1 (ア) 称揚 もしくは 賞揚 (イ) 行使 (ウ) 創始 (エ) 渴望 (オ) 錯覚</p> <p>問2 一人では達成できない豊かさや幸福を与えられること。</p> <p>問3 I = 自然的祖国 II = 市民的祖国 III = 平時 IV = 戦時</p> <p>問4 市民が共通善に貢献するようになる動機（心理的起動力）として重要ではあるが、それを渴望するあまり野心的になり過ぎると不正行為を起こすこともあり得るため、危険性を伴うとも考えている。</p> <p>問5 (キケロのパトリオティズムが) 共通善への奉仕を中核とする考え方には共鳴しつつ、その奉仕の動機となる名誉心や名誉欲は市民に過剰なプライドを生じさせ、社会の連帯を失わせる危険があると考え、万人によって追い求められるべきパトリアを、現世の地上の国ではなく天上の「神の国」と見なすように組み替えた。</p> <p>問6 解答例 行列の割り込みについて考える。公共のマナーやルールに反する行為であるが、割り込む当人としては時間の短縮という利点がある。しかしその代わりに当人は、周りから白い目で見られたり、注意されて居心地が悪くなったりするリスクを負う。きちんと並ぶことは、少し待つとしても、誰もが気持ちよく確実に目当ての品に辿り着ける方途なのであり、納得の仕方次第で、共通の利益と自分自身の利益が重なり得ることを示している。 (一九七字)</p>		

採点・評価基準(具体的基準)

教科・科目名	国語 (前期日程試験：令和5年度)	問題番号	K2-1 K3-1
対象学部・ 学科(課程)等	人文社会科学部 (法学科、経済学科)		
出題のねらい	① 現代的な評論文を読んで、基礎的な知識、文脈を把握する読解力、論理的な思考力と基礎的表現力をみる。		
採点基準 (点数は200点 満点の場合)	① 配点60%(120点) 問1 20点(4点×5) 問2 10点 問3 16点(4点×4) 問4 14点 問5 25点 問6 35点		